UNIVERSITY OF CAMBRIDGE

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

Tuesday 3 June 2008 13.30 – 16.30

J.12 JAPANESE TEXTS, 1

*Candidates should answer **both** questions in Section A and **one** question from Section B.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Section booklet.*

STATIONERY REQUIREMENTS
20 Page Answer Book x 1
Rough Work Pad

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator.

SECTION A
Candidates should answer BOTH questions:

1 Translate into English: [35 marks]

A young man relates an argument he had with his father to a third party

「衝突の仕方を知らないふたりが、初めて真正面からぶつかったわけでしょう。どっちも加減を知らないんですよ。とことんいっちゃう。父も僕にひどいこと言いましたが、僕も輪をかけて父にひどいことを言いました。父子でなかったら、二度と和解できないような罵倒の仕方をしちゃったんです」

親父に裏切られたような気もした、という。

「バカもん、大学行くなら東大だ、東大がいちばんだ、東洋工科大なんざクズだ――そんな価値観を、まさか親父が持っているとは思ってなかったんです。前に、子供の頃から僕は親父を尊敬していたって言いましたよね？ それはお世辞じゃなしにそうだった。腕一本で働いて、僕らと祖母の暮らしを支えてくれてきたわけだから。だけど、その父が僕に、有名大学へ行け、行かないヤツはアホだみたいな言い方をするってことは、裏返せば、父自身が自分の人生に何の価値も認めてないってことになるじゃないですか。学歴もない教育もない、ただの運転手なんだからってね」

何よりも、それに驚いた。がっかりした。

「じゃあ父さんの人生はなんだったんだよ、父さんの誇りはないのかよって、僕が詰め寄ると、俺の話をしてるんじゃねえ、おまえの話をしてるんだって、また怒鳴る。僕にはそれ、親父が僕から逃げているようにしか感じられないわけです」

キヌ江がおろおろして宥めに入ろうとすると、直澄は彼女のことも怒鳴りつけたそうだ。

「今考えれば、父も僕とぶつかったということで、すっかり動転してたんでしょうね。あれよあれよという間に売り言葉に買い言葉でどんどんエスカレートしちゃって、ついつい心にもないことを口に出していたということだったんでしょう。だけど、その場の僕にはそれが判らなかった」

無理もないことであると、第三者には簡単に言うことができるが。

「俺がどんなに苦労しておまえを育ててきたのか、おまえ判ってんのかと、こう来るわけです。いい大学へ行っていい会社に勤めて、俺を喜ばせてやろうとはおまえ思わないのか。俺が自慢できるような人間になろうとは思わないのか。なんて情けない、冷たいヤツなんだおまえは、と」

加減 measure; control
罵倒 verbal abuse
お世辞 flattery
アホ ＝バカ
責め寄る attack, press hard
キヌ江 （「僕」の母）
宥めに as peacemaker
直澄 Naozumi (name)
動転する be stunned, surprised
判る＝分かる

Miyabe Miyuki, in *Riyū* (2004), pp. 242-43

2 Translate into English: [35 marks]

帰りがけに研究所の技師の人が私にこの会をどう思ったかときくので私は「日本での問題のとりあげ方とフランスでの取上げ方で一つの大きなちがいを感じた。それは日本で女性科学者の問題が検討される時は一般に男性に対しての闘争的なものになるのにこの研究会ではむしろ男性も女性に協同して、一緒に今までの悪条件を改良しようとしている事で闘争の相手はむしろ政府の施政に対してである事で、私がかねて日本の女性科学者の運動で全面的に賛成出来なかった理由が一つつかめたような気がする」と述べた。私はかねて、男性と女性の関係は何れにしても両方が人間生存上必要不可欠なものなので資本家対労働者の闘争のように相手がなくなってよいものとはちがう事、但し社会問題として、未発達な国ではどうしても男性が闘争の相手になるにしても、それは男性としてではなく、社会的に男性が占めている地位に於ての非文明さに対するものだという事が紙一重のちがいのようで大きな労働問題としての相違なのだと思っているので日本の問題のとり上げ方に全面的に賛成しかねているのがここにあったという感じがするのであった。この点で、私は研究者を養成する水準での女子大学の存在も実はあまり賛成でなく、それは発展途上の過渡的段階のものと思うのである。もう一つ、これは最近私がフランスにおいてのある招宴で経験した、いわゆる日本では何れも相当文化的水準の高い筈の大学関係及び文部省関係の人達に私が当然賛成を得るものとして話題とした事に対して全面的反対を受けた事を思い出したのである。それはある日本の週刊誌を偶然みた折に日本の大学生の卒業生の謝恩パーティに女子学生が振袖姿もあでやかに写っている写真について私が「大学の卒業のよろこびという事をああいう形であらわす精神的な低さにがっかりする」と言った事に対しての反対である。「どうして女性が美しく飾っていけないのか」「親達がこうして娘の前途を祝ってやるのが悪いのか」等々の反対意見に私は唖然としてしまった。

施政 administration; policies
紙一重のちがい only a shade of difference
過度的 transitional
招宴 formal dinner
筈 はず
振り袖姿 formal kimono
前途 future prospects
唖然とする flabbergasted

Yuasa Toshiko, 'Josei to kagaku' in *Zoku Pari zuisō* (1980), pp. 158-59

(TURN OVER

SECTION B

Candidates should answer ONE of the following two questions:

3 Translate into English: [30 marks]

スクランブル交差点で、彼は、念のためと数えてみた。関口由起子を加え彼を加え、ちょうどぴったり十八名いた。安堵した。彼の顔に思わず笑でも浮かんだのか、和尚が、「大変、御迷惑をかけますねえ」と、鼻に抜ける声で言った。「みなさん、お齢を召してますから」和尚はそう言い、骨があるのか疑いたくなるほどのふっくらした青っぽい指であごのあたりを触る。女の子が頬杖をついた仕種だった。それがこの和尚の癖らしかった。彼は、曖昧にわらった。左手に、黒の、不つりあいな手提げを持った洋服姿の老婆と、腰を屈め、ひょこひょこと踊るように歩く老婆が、赤信号の交差点の中に入っていこうとした。「渡らないで下さい、渡らないで」彼はあわてて、ハンドスピーカーのスイッチを入れて、言った。「信号が青になってから、渡って下さい。車と競争してみても、勝ちっこないんですから」彼の言葉に、年寄りどもはどっとわらった。「せっかく浄徳寺までおまいりに来て、あの世へ直行ということにでもなったら、つまりません」彼の言葉を、男がわらっていた。その男のコートをつかんで、十三、四になるのだろう、ぶよぶよした顔の、一見してすぐ白痴とわかる女の子が、ゆすっている。男は、知らん顔をしていた。「おおっおおお」と声を出す。コートのすそをいきなり口にくわえる。男はやっと気づき、わらいを眼尻に残したまま、その子の頭に手をおく。口から出たコートのすそは唾で濡れている。スクランブル交差点の信号が、青に変った。「さあ、渡りますよ」彼は、間髪を入れずに言った。通行人が、わらっていた。スクランブル交差点にチャイムがとりつけられているらしく、お馬の親子のメロディーが鳴りはじめた。

安堵する　be relieved
和尚　priest
齢を召す＝年をとる
頬杖をつく　prop a cheek
仕種　gesture
手提げ　bag
勝ちっこない bound to lose
あの世　the other world
白痴　'idiot'
ゆする　rub against
唾　spit, saliva
間髪を入れずに without pausing
お馬の親子　(famous song)

Nakagami Kenji, 'Jōtokuji tsuā' ni *Misaki* (1993), p. 123-24

4 Translate into English: [30 marks]

『菊と刀』が従来の研究と「まったく異なった」日本研究書であるという理由は、これがベネディクトのいう「どんな孤立した行動でも、お互いに何らかの体系的関係をもっている」という前提から出発し、「何百もの個々の単系が、どんなふうに統合的な型(パターン)に分類されているか」を重視する「文化の型」研究であるだけではない。その理由は二つある。一つは、これが「文化相対主義」的立場からなされたものであること、二つは、「アメリカ(あるいは一般にいう『欧米』)対日本」という意識的な比較の上でなされたものであること、である。とくに後者の場合、通常人類学的研究においては「文明(西欧文化)」対「未開文化」という形での比較がみられるが、こうした「偏向」を抜け出そうとする試みがベネディクトには強くみられるのである。

この「文化相対主義」という基本思想、ここにベネディクトに代表されるアメリカのカルチャーに対する見方がある。それはドイツのクルトゥール観のみならず、ヨーロッパのカルチャー観とも違っている。

(「文化」の相対化 文化人類学という学問は新しい学問で、その源は、西洋が世界各地に植民地を持つようになって、その現地の事情を理解する必要から生まれたと言えよう。スペインやポルトガルの支配者は、植民地の住民をまともな相手と考えてはいなかったので、もの珍しさの調査はあっても客観的な研究の必要はなかった。イギリスやフランスの時代になって、ようやく「未開、原始」の住民として相手にする必要を考え始めた。民族学と言われたのが、その元である。

この学問がカルチャーという言葉を使って考え始めたのは、一九世紀も末近くなってからである。カルチャーという言葉で、西洋のカルチャーとは違ったもうひとつ別のカルチャーがある、と考え出してから、客観的な学問の形をとるようになった。イギリスのタイラー(Edward B. Tylor, 一八三二〜一九一七)の有名な定義はその始めであろう。すなわち、「カルチャーまたはシヴィリゼーションとは、知識、信

(continued on next page)

仰、芸術、法律、慣習その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や習慣の複合総体である」

タイラーは文化人類学の父と言われたが、以後イギリスを中心にこの学問がさかんとなる。やがて二〇世紀になって、ボアズ(Franz Boas, 一八五八～一九四二)を中心に、アメリカの文化人類学が起こる。イギリスなどヨーロッパの文化人類学者が、自分たちのカルチャーの外の植民地のカルチャーを研究対象としたのに対して、ボアズに始まるアメリカの学問は、自分たちの国の中にあって、自分たちのカルチャーとは異なるカルチャー、つまりインディアンや黒人のカルチャーを、まともに問題として取り上げた。これがアメリカ文化人類学とヨーロッパの学問との決定的な違いである。カルチャーの概念そのものの違いも、ここから生まれたのである。西欧のカルチャーだけが唯一の普遍的なカルチャーであるのではない、インディアンのカルチャーも、その諸部族のそれぞれのカルチャーも、黒人たちのカルチャーも、おのおの独立した、価値において対等なカルチャーである、という考えがここから育った。これがいわゆる「文化相対主義」(cultural relativism)である。

「菊と刀」*Chrysanthemum and the Sword* (by Ruth Benedict)

体系的	systematically	偏向	tendency; bias
単系	individual strand (of culture)	もの珍しさ	marvels

Yanabu Akira, *Bunka* (1995), pp. 70-72

END OF PAPER